

上藍天中の『無明室録』について

川 口 高 風

(一)

筆者は昭和五十八年三月「磁祖加藤民吉をめぐる洞門僧」

(「宗学研究」第二十五号)において、文化年間、加藤民吉

が瀬戸から九州へ渡り、磁器製法の技術を習得し瀬戸窯業を再興して磁祖の称号を得た背景には、洞門僧との交流と外護のあったことを明らかにした。そして、民吉が九州においてベースとしたのは、東向寺(熊本県本渡市本町)で、その住持上藍天中を尾張の神藏寺(名古屋市名東区一社)から東向寺住持へ推挙した遍歴の雲水僧について瑞岡珍牛、黙室良要、漢三道一らが考えられることについてもながめてみた。

しかし、その天中は、神藏寺を首先地として東向寺、続いて皓台寺(長崎市寺町)へと晋住している。したがって、昇住

できた背景が政治的であったか、それとも天中個人が、当時の善知識であったという評価によつて昇住したものかについて、天中の一面を少しく考えてみたい。

(二)

天中の略伝を見るに、皓台寺の歴代住持の略伝集である『海雲山歴住略記』をみると、「十九世天中禪師伝」があり、それをあげると、

十九世天中禪師傳

十九世天中禪師。號^ニ上藍。尾張州菱野人也。以^ニ延享丙寅二月^ニ生^ニ大澤氏。神志沈審。卓^ニ立物表^ニ。寶曆乙卯。師年十四。投^ニ州之神藏大酒店和尚^ニ剪除周羅。店累^ニ遷信之全久。丹之永澤^ニ。師追^ニ隨之。土木形骸。如^ニ楊岐輔^ニ慈明^ニ。爾來

上藍天中の『無明室録』について(川口)

上藍天中の『無明室録』について（川口）

學無常師。蟹案雪牘。垂露懸針。傍交文雅之友。當時天下。專乎棒喝暗證。師在其間。不售迷悟。故與世背馳。安永己亥。得法於曇成老人。初住神藏。後住東向。四方子來。鼎新庫院。文化丙子。應鈞命住于本山。明年入府謝恩。賜銀賜衣例也。歸路得病。寂于京洛錦街玉谷氏家。實文政改元戊寅五月十七日也。師溫厚謙讓。

身無長物。囊無宿貨。芙蓉。宏智。其所景慕也。師頌俱胝豎指曰。俱胝豎指。一少十多。甘果苦果。囊謨婆訶。黃泉綴諸師傳。獨於師傳。如蔡邕於郭有道耳。とあり、概略が明らかになる。しかし、民吉との関係はまったく記されておらず、この伝記では明らかにならない。しかも、文化丙子（文化十三年、一八一六）に「鈞命に応じて本山（皓台寺）に住す」とあるのみで、どのような理由から皓台寺へ昇住することになったかの具体的なことも明らかにならない。そして、伝記中に「傍交文雅之友」とあるところから、天中は、若い頃から文人、詩人などとも交流して学問を究めていたことが推測できるのである。また、「明年入府謝恩。賜銀賜衣例也。帰路得病。寂于京洛錦街玉谷氏家。實文政改元戊寅五月十七日也」とあり、幕府への謝恩と銀、衣を賜った後、長崎への帰路の文政元年（一八一八）五月十七

日には、京都の玉谷氏宅において病氣で示寂したとある。しかし、口伝として、民吉が瀬戸の磁器を復興して隆盛せしめたところから、その背景者であった天中は、有田窯業の職人によつて殺害（毒殺）されたという説も伝えられている。

(三)

天中は若い頃から文人、詩人と交流があつたところから、天中に著作があつたのではなかろうかと考え、著作について調べたところ『新禪籍目録』（昭和三十七年六月 駒沢大学図書館）一五九頁をみると、

詩偈集 一冊 上藍天中 大分長松寺

とあり、筆者は、長松寺（大分県別府市朝見）の資料調査を行つたが見出すことはできず、すでに散逸していた。しかし、山門に掲げられている山号額（萬年山）が天中の揮毫であるところから、當時天中と長松寺との関係があつたものと考えられ、『詩偈集』の伝わつていたことはそれを証するものであろう。

次に、『国書総目録』第七卷（昭和四十五年九月 岩波書店）六四〇頁をみると、

無明室録文部 一冊 禅宗 天中 岸沢惟安

とあるため、旭伝院（静岡県焼津市保福島）の岸沢文庫を調査したところ、所蔵が確認でき撮影することができた。そこで、この『無明室録文部』について考察を加え、世に紹介しようと/orするものである。なお、本書は『無明室録文部』とあるところから、「文部」以外の『無明室録』が存在したものと思われるが、他の著作については現在未詳である。しかし、天中が、語録を残していた事実は明らかになり、語録を残す善知識であつたという評価は大きくとりあげられるべきであろう。すなわち、政治的に大刹へ昇住したのではなく、善知識として評価された人物といえるのである。

そこで、『無明室録文部』の内容について考察してみたい。

まず、編者は「侍者某甲編」とあるのみで、具体的的人物の名は明らかでなく、天中の随侍者によつて編集されたものであらう。また、『無明室録』の題は、本書に所収されている文化元年（一八〇四）冬、自ら記した「無明室録」の末尾に「於是信_ニ不明無知不_可捨因室題_ニ無明_ニ号改_ニ螺睡_ニ」とあり、文化元年の住持地東向寺の丈室を無明室と称し、号を螺睡と改めているところから東向寺時代の語録を『無明室録』と称したものと思われる。したがつて、東向寺時代の寛政十二年（一八〇〇）から文化十三年（一八一六）の十六年間の語録が

上藍天中の『無明室録』について（川口）

中心となつてゐる。構成を考えてみると、序、題、跋が三十、疏は十一、記は四、贊は五、碑銘は一の総計五十一詩の語録で成立しており、序、題、跋が多くみられる。これらの中、特に注目されるのは「豪徳請漢三和尚山門疏」で、寛政十二年（一八〇〇）八月に東向寺より豪徳寺（東京都世田谷区豪徳寺）へ転住した漢三道一へ山門疏を贈つており、また、「同門疏」は、漢三が享和三年（一八〇三）秋に豪徳寺より清涼寺（滋賀県彦根市古沢町）へ転住した時に贈つた山門疏で、東向寺十四世漢三の後席に天中が就き、さらに、清涼寺より皓台寺十八世に昇住した漢三の後席の皓台寺十九世に就いた天中との関係の密接さが明らかになるのである。

これらのことから天中は、政治的に大刹へ昇住したのではなく、文雅に秀でた当時の善知識として、また、能筆家として、学僧で名高い漢三道一と交流し、推挙されて大刹へ昇住したものと考えられよう。

そこで、ここに『無明室録文部』を紹介し、語録よりみた天中の力量と行動を明らかにしようとするものである。

無明室録文部（題簽）

『無明室録文部』翻刻凡例

（墨蹟に、釈天中と記したものがある。）
釈天中とあるため、淨土僧と誤解される。

文部

一、語録の構成順序を明確にするため、便宜的に通し番号を題の頭に付した。

二、本語録の後に、国泰寺（広島市中町）の晋山開堂の諸疏

がある。しかし、これらは元文五年（一七四〇）三月、宝暦三年（一七五三）二月、宝暦八年（一七五八）正月の疏のため、明らかに天中の語録ではないところから、ここでは削除した。

三、本語録の中に、筆者が確認できることを注記として（ ）に付記した。

①勝会妙偈集序

古人曰摩訶衍法離四句、絶百非、時哉今夏白龍山主、李鷲嶺宏範、樹安居正軌、四來龍象以不可思議之妙偈、讚楊法王法令、者數十篇、侍者某筆以為一帙、請余冠語、即電閱一過知飽、喫醍醐、極果溢余不言々不語々實天真妙唱不于舌頭二者也是

為序

②奉辨才天女宝前

野衲平日帰辨才天女、求擁護、有年、千茲、文化元星次甲子、冬夜夢天女現、形告、余曰感爾志願之篤、焉今為爾說、一偈、爾聞之余誠心願、聞之天女即說、偈曰自心天女現心中、

妙相端嚴泣画工、福德無量元備、我利生何祈有為功、余聞了再
拜夢即覺矣於、是益信天女之利生、不怠修辨天供、自記瑞
夢因由以遺之後代、示不信之者爾

裡坐之句於、是信不明無知不可、捨因室題無明、号改螺
睡、文化元年甲子冬自記

(文化元年(一八〇四)冬)
(東向寺で自記したもの。)

③妙泉開山大藏吳雲禪師贊肖像 四六文

嚴然眼日照、徹邃幽、住院全終始、唱道多春秋、豈啻檀徒欽、
外護還令僧侶勵、內修饒益等江海、高德厭山丘、子以多
喜孫又無憂、要見宗師不遷相、吳雲影入妙泉流

(東光寺(長崎県北松浦郡佐々
町)十三世大藏吳雲のこと。)

⑤含暉亭記

古曰石蘊玉而山暉水懷珠而川媚實哉言也、真應禪師確守木
叉、參正伝禪、入明師室、常披閱光明經、大通深義、戒也
禪也教也研磨心珠、以重襲彩光、深秘不發、余偶入師聖會
略見師潛行密用、圓而不欠明而不暗、溫柔之德頗有類珠、以
是題師居室、名含暉亭、前有山名曰天面、層峯入雲翠
影落庭、其幽覽奇賞以言難述、蓋山之聳而不動、師之坐而住、非
思量本形乎故取山名以為師之別号、於旃亭名兼別号、並
画以贈之、師他日放祥堯於四海、利含靈於萬世、不待言而
可知之矣

④無明室記 黑瞎者睡
眠黑名也

鄙性自幼志道、暗昧多病而不進到中年、謁明師、伴賢友、
進寸退丈、顧是宿習之所、使然乎雖然不措參禪聞法、積年
無益矣、徒費粥飯耳、黑瞎已故、師不呵友不規、荏苒越月、兀
々度日、及老年、自懷愧耳、仏曰從冥入於冥、永不聞仏名、
是余謂乎今也、雖求知欲明不可得、自嘆曰、嗚呼天之所命、
欲避無地、獨守性終耳、已哉傍有、人告余曰勿棄逃焉、寶鏡
三昧歌曰、潛行密用如愚、如魯只能相續名主、中主余聞傍人
規諫之言、如少有所得、又自想像兼中到頌有折合還歸炭

⑥冬陽亭記

天草以一洲為一郡、蓋南肥十四郡之一也、洲形似橫螺、故称
曰洞螺洲、東西百五十里、南北九十里、地險隘多平坦鮮矣、居民淳
素有太古風、故雖邊垂下邑、騷客幽人多愛而至遊或卜所居、

上藍天中の『無明室錄』について（川口）

岡田翁世業、□住、崎陽、安永間初入此洲、僑寓本戸、大以其術、施靈方於病家、得平復者多矣。邑人以為大幸、也是以邑

長屢留請為邑人、遂去旧鄉、遷家屬來加邑籍、焉嘗為屋

宅、亭号冬陽、凡三十季余住于茲、如一日矣。余偶到明德禪

刹、會翁父子、尋登、亭坐定、清話以亭之記、求余余以不能

筆語、固辭不、可乃開、亭遐眺東北、群山崢嶸、海水渺漫、宛如、圖

画、當南有古城跡、松樹翁鬱西隣、精舍、祇樹陰森、春夏之際

有衆鳥聲、在亭上、聞之遠近、景耳目樂無不佳者矣。余謂

翁曰、棲遲于此、對丹竈、坐殆足、以婢睨往昔、學仙道、避塵

境、處巖窟澗戸、斷穀食、吸沆口氣、希長生不老之士、然則

以此亭、比夫瑤池瓊樓、玄圃珠閣、其勝劣如何？

⑦題番匠極秘卷自註曰掌中直今出職原鈔木工頭下

或番匠之長世所家伝之秘書、一軸、岡部竹藏借之、小見山子健、謄之卒業之日持來求、以余之一語、書卷端、余語之曰、吾朝上古雖有掌中匠令者、未精其術、是以欽明推古間上宮太子多從異鄉徵、老工匠者、而後其術大弘也。子孫不墜其技、傳而至于今、殆千有余年、弥久而益盛、皆是太子賜也。工匠族不可不知此。一軸記奧旨之梗概、以遺將來、雖文辭野得、意而忘言、何憂無潤色哉。長伝雲仍可、以秘筐笥矣。

⑧為範頓首上書仙英和尚玉案下代作

雖未接高標、久聞英声、盛於西土、遐想道履、震良輕利、輔翼無怠倦、忻幸無量、陳者不肖、有阿兄繼席之遺命、今將移弊履、和闇以為開祖之芳孫、檀從興議奉迎乞令、補虛席、此修尺一、以促來儀、勿吝、客飛錫、且為請儀、拝贈方金一片、祝扇一揮、海容幸甚、不贅、余言、臨書戰兢以布腹心矣。

⑨長樂大鈞和尚遺稿序

余曾住尾之神藏、之日初謁長樂寺主大鈞老師、師直爾、室內燒香坐所、展、氈、屈尊就卑、其忼接如大賓、嗚呼、師先生于余二十年、余然不以、余後進、余亦心醉、師遜讓謹慎、其後屢來往、為忘年交矣。師禪席於神足海公、退居乎槃陸庵、無幾羅疾、示寂焉、師之徒為範公、從遊余久矣、微余寬政中建小会、以範公隸于板首、後及移法旆於南肥之天草、以範公為神藏之繼席、公至孝也、清書師遺稿、請余於冠語、乃開卷目耕一過、其偈頌法語若干篇、不倣艷飾、頗出赤心者也、且生前弘道之德、雖不載錄中、遠近衆人之所共知也、後代為其子孫者披覽此

（本卷の原本には、「文化十一年二月上浣 何斎翁撰并書」とある。）

集一學ニ師之余風一何耻ニ仏祖一余親見ニ師行狀一又聞ニ語言一故綴
數語一以証ニ之如レ斯矣

(長樂寺(名古屋市南区呼続町)十六世千外太釣のこ
と。弟子墨外為範(神藏寺七世)の請によつて記す。)

(10) 獅子吼集序

聞ニ獅子名ニ尚矣未レ見ニ真形ニ後代画師岡ノ之匠氏彫ニ之陶工塑
之其状異ニ世之毛群ニ古曰栴檀林無ニ雜樹ニ鬱密深沈獅子住此知
獅子必仄ニ地居不レ混ニ凡畜隊ニ明矣以レ是雲巖愛而弄ニ之仰山見
而指ニ之雲門聞而推ニ倒之ニ雪竇近而扶ニ起之ニ粵某具壽淵才秀
茂雅度開弘偉世之器而実金毛之種子也曾入ニ深山ニ臥ニ幽窟ニ返
擲再帰ニ岩下ニ今冬入ニ干淘汰聖会ニ分ニ主席之半ニ居ニ千衆頂ニ
藏ニ金牙ニ蘊ニ玉爪ニ有ニ威不ニ猛宋宗門之君子也清衆各心ニ醉其
美德ニ或偈或頌以ニ賀ニ選擢之榮ニ書記某纂ニ輯之ニ卒業之日序名
請ニ余披ニ覽之ニ篇篇句句哮吼之余響滿ニ耳終頭不レ交ニ異類之
語ニ請名ニ之曰ニ獅子吼集ニ具壽異日踞ニ須弥座上ニ震ニ全威ニ發ニ
雄音ニ說ニ迷子之訣ニ不レト知ニ之具壽勤ニ之応ニ干需ニ作ニ序名ニ以
與焉無ニ令ニ余言ニ為ニ食言ニ好矣

(11) 拳桂集序

上藍天中の『無明室錄』について(川口)

(11) 拳桂集序

世間有ニ及第二出世間亦有ニ及第一雖ニ事殊ニ理還同矣叢林古今
選ニ稠衆之中逸群之士ニ以為ニ上座ニ諸人之所レ知也道本僧夏臘
已滿今冬於ニ吾之会ニ称居ニ第一座ニ同道同行之衲子各以ニ伽陀
賀ニ本上座甲科之榮ニ書記集録本上座携來ニ余之室ニ求ニ題名ニ余
告ニ之曰心空及第亦及第也陳氏詩曰桃花先透三層浪月桂高拳
第一枝乃第一枝第一座也因目以ニ拳桂ニ蓋得ニ拳桂之拳ニ不レ同ニ
青衣士ニ他日佩ニ金章紫綬ニ蹈ニ珠階ニ登ニ玉殿ニ數ニ日可レ族焉矣
是為ニ序

凡有語對ニ無者也未レ有ニ無ニ無語ニ而有ニ有語ニ者々然則曰ニ有語
曰ニ無語ニ語亡慮一語而無ニ二種之語ニ是以飲光微ニ笑千鶩嶺ニ
得ニ單伝之深旨ニ乃分座之創起也爾後續ニ其旧統ニ者歷世不レ乏ニ
其人ニ至ニ千今ニ二千有余載于茲雖ニ有ニ分派ニ皆出ニ於一源ニ雖ニ
異ニ作用ニ同ニ於帰趣ニ焉奧僻巖具壽信陽伊奈人道標卓絶英爽俊
邁今夏在ニ于吾邦常安精舍ニ分座同ニ古轍ニ而無ニ異跡ニ於是乎
耆德鉄漢鳥ニ趣清会ニ裁ニ梵偈ニ以賀ニ榮選ニ書記某編ニ次若干首ニ
成ニ卷帙ニ具壽携來請ニ干序余ニ余曰如ニ此集ニ讚ニ揚盛拏ニ至矣尽
矣其片言也其隻句也有語而無語無語而有語苟不レ属ニ染汚ニ可レ
謂織成古錦含ニ春象ニ者也是為ニ序

上藍天中の『無明室錄』について（川口）

(13) 開鏡集序

靈樹知聖禪師請門跋脚以為首座誰謂誤選松栄雖未
知鏡山上座任以首座不可謂無例已及相見卓偉威儀
萬人所仰蓋上座夏薦盈貫古首座而非今首座也曾磨慧鏡
鑑覓不昧闔會清徒頌以賀之書記淨緝序名需千余余曰上座
他日為化城之主宰靈鏡懸台上以照迷黨數日可族矣因
命之曰開鏡集千玆賦一絕以塞余白分座人天眼數篇讚
偈華清書功已畢字画不相差是為序

(14) 栄選集序

孝恩德士孝牛禪師徒也初行閩東掛錫青松之会下無幾聞
親教之約隱帰寧侍巾瓶數年禪師臨遷化日遺言曰我滅度
後以此庵室付爾長在此守護棠陰謹承師命誓不行
他可謂尽孝報恩矣今夏於吾山表儀于衆古曰大器晚成
嗚呼如恩德士實宗門偉器也有賀偈若干首緝錄携來需乎
題名即目曰栄選集蓋取讀諸衆栄選之意也憶夫德士曾
陰積德久矣他日必有陽報至其子孫涵濡余澤法化栄盛亦
不可罔因記之以為序

(15) 凤鳴集序

漁父居水樵夫住樹此所謂同類相聚者也非類不混焉故古人
曰鷄棲鳳巢不其同類出去法門昆弟一會同居皆一氣類也
宜住難遇念与希和融矣且飯啄頹頑不離其倫是賓主
之交誼也故說六和合以和不和合者欲令知有積種亦同
氣連枝之好在也可思不可諉矣粵玄鳳元座三河之人曾有
志下紫海掛錫於吾松山數間道忘寢食密脩潛行而達蘊
奧矣今冬分座表儀于衆同被禪和子褒賞參休或絕或律各
裁梵偈以伸賀悃覃制末緝錄淨寫卒業之日元座入來余
室責余於序名乃題目鳳鳴集蓋慾通元座他時棲碧梧
誘掖同志共飛鳴祥舞大振起上古禪風者也是以預名此集
以俟開法瑞曰爾

(16) 花笑集序

世尊拈花迦葉微笑是付法分座之藍觴也祖師西來後到三百丈禪
師創制禪林之規繩焉於是乎前堂後堂各置首座一人以
為定例也吾朝往古措不論慶長中以公帖定曹洞一宗之首
座曰夏薦未滿者猥不許任職必押拳撥草年積行解相應之
人或一夏或一冬俾勤之者称曰罷參今冬請道倫禪德隸
于吾會之籍首有賀章若干篇輯錄既成乾千老衲求於序

名老衲粗知禪德之徹，瞬目之骨髓，窮破顏之蘊奧，因題目花笑集，蓋示古實也。他時禪德投師室，佩宗印，為弘法總府，宜播揚大教，必慣習村院阿師，勿改旧轍，是為序。

(17)賀偈集序

江上座預托某禪人，以賀偈集序，求于余，余於江上座，嘗畜膠漆，是以不辭。夫江上座久在于清涼，消除三障，諾開五眼，蓋歸敬七仏祖師之功德聚也。況今冬分座於人天眼目，乎聞者見者皆歡喜，不足作讚偈以贈之。二首而不止，積至若干篇，終集錄成，卷無剩句。虛辭如貫寶珠，褒也賞也，流溢言外焉。吾知所致，上座積累也。他時為歡喜藏摩尼宝，積如來之補處，於十方土放大智光，遍照群萌，使發種智。上座超階願望滿足于茲，宜保任勿忘。令退墮，應于需，序如斯。

(18)默耀集序

隰州古佛曰寥々冷坐少林，寥々全提正令。迫世吾門參徒吐孟浪語，學掠虛禪，耳古風，慕正宗焉。者極鮮矣。粵獨明禪德賦性沈鬱，小語低頭，常忌饒舌，雖然懷障，百川復倒瀾之英志。從遊余有年矣。祇役左祖之續，海口難伸。今夏在于我龍蛇窟，充第一位，寔足以統飲光韶石之遺緒矣。闡會清衆，稱慎。

上藍天中の『無明室錄』について（川口）

獨之心操，且賀榮舉之佳瑞。以詩偈若干首，厥言玄厥意妙，如驛珠趙璧，璨然集人目光焉。書記某編次，淨寫卒業之日，禪德徵序名於余，余乃目之曰默耀集，蓋禪德他日住一方，確守面壁之旧軌，端坐之古轍，以執化柄，慧燈增輝，祖席革弊，將禪德勤之為之，是為序。

(19)讚揚集序

古曰易開始終，口難保歲寒，心難哉。當世不改志操，而全於始終者，誰越大俊。上座吾支院芳証鱗公白足之徒也。稟性俊逸，撥草瞻風，磨不磷，涅不缁，能遂初心。去秋以慈母老，帰省無幾，依棲吾山。余視為其人，如仙鶴在雞群，是以選于衆，隸于千板首。恰如有靈山大龜氏黃檗陳蒲鞋，靈樹偃跋脚，勝會兄弟列刹者，宿見聞隨喜。讚揚盛舉，各以賀章書記某編次為小冊子。上座持來題目求余，開卷電閱，一過篇々多讚揚，寵參之德，故名以讚揚。已有前贊，須慎後毀，是為序。

(20)瑞光集序

本光首座尾丹羽，昌寺主道因老禪受業之徒也。文化丙寅，櫻同智雄禪衲，下九州，航此洲，掛錫吾山，篤志于學，無倦色矣。無幾聞，法兄祖鑑禪師住濃陽龍雲，三冬結制，遙行左

上藍天中の『無明室録』について（川口）

祖聖会翌春解制後帰寧受業焉余亦當神藏開始三十三回為掃塔春二月赴尾州訪久昌寺主茶話因及光首座事寺主余舊相識也告余以有光首座甲科望余全諾由是光首座与余同道再到吾山焉未春撰充于今夏板首皆夙因所感也豈僥倖謂也乎夫吾宗之首座依釣命以定之國家憲法也他派之所無實以為重任豈等閑之職也乎哉仏世以飲光為首座是首職之權輿也相続世世不不乏其人一本光首座亦舉飲

光之嘉猷則奚異昔飲光歟可知飲光与本光光光無礙前後同一轍更無第二人是以闔會英衲塾中學生諸山耆宿見而讚之聞而賀之或以長篇或以律絕不日積滿卷帙淨寫卒業日需序名于余余熟視集中言々句々雕冰削玉恍如上崗遊玄圃璨然爛然奪人目光宛如見燈明仏本光瑞是以名之曰瑞光集光首座他日上宝華台放光動地續燈明仏之遺緒以開化儀十方群生齊出昏衢各向光明藏裏藏身去亦不可疑是為序

(文化四年(一八〇七)春、神藏寺へ赴き法地開山大店鱉雪の三十三回忌を修行する。一月、久昌寺(江南市大字小折)を訪ねる。)

門升進之始也義闕具寿侍余有年于茲今夏滿是以挙充堂中一座大振道風諸衆感伏說偈作頌以賀集録已成就于書記某乞作弁語辭而不應遂來余之室又責于余狹路難避諾而應需乃告之曰罷參名不虛設勿錯会休罷不携之確語退歩咬嚼心心不差則堪為罷業忘功大尊貴生之種草是為序

② 栄選集序

夫出白舍入繻門觀勝因知善緣豈偶爾哉若不栽智種培靈根爭見艷色滿中香氣溢外粵活文大德弗類稂莠還同芝蘭初以隆翁為親教焉後以海老為本師焉依二師愛護生長槁慶之田不移卑濕之畹常不華其言誠實其意可謂破脚還魂龜氏復肉是故進退踏規行鮮相忢今夏分半座於染獄接物利生驚聳衆目一會麟鳳四方象龍繡

口錦腸呈祝章贈賀詞以潤色聖筵以嚴飾英職又不渝快哉業已至制末日書記梵航上座緝錄治卷以名之與序需于余余固知至大德之脩德之極練行之闔域焉且余也入会佐化是以欲辭不可得因命名榮選集或問余曰榮選之義如何余答曰他時異日期大德之忢巨刹名藍之超選致唱道弘法之繁榮而已矣重告大德曰能以安忍淳厚流傳芳馨於叔世公狀曰剃髮受具經二十夏而後超一級称之曰罷參乃吾

② 罷參集序

是為序

(23) 宝聚集序 求寂 梵語室羅末戶羅華曰
求寂舊譯曰沙弥

有懷寶而迷邦者有知宝而達道者迷邦者措而不論以達道者嘗論之夫出世有三宝曰仏寶曰法寶曰僧寶我輩初為求寂之日本師授弟子受領受之後于身于心確乎護之夙夜不忘年積日累自始知所以為寶也具戒之後負笈戴笠東漂西泊遍叩叢席拋捨身命琢之磨之十三年于此重裏以長不失焉行住坐臥用之不生瑕類也故於我法中選得此宝者稱以為上座焉昔日釈尊分三寶座於大迦葉伝心宗之家設分座職者蓋攀旧例也故叔世不乏其人矣今冬請勢陽寶積禪刹徒容海大德以充于吾堂中上座大德元分三寶積之至宝則豐富其宝可知矣聖會道侶又不道貧各賀禪德分座有絕句有律又有古体言々句々皆聯靈宝彩光難覆至制末日緝錄淨寫請序名於余因名曰宝珠集他日大德入貧里窮巷代藏摩尼寶積如來賑濟困窘以曜三寶之德數日可族而已是為序

雲衆選于衆以乙禪大德充上座職大德固有密修潛行大黼黻宗門是以耆宿英衲嘉大德之及第祝以伽陀余幸加衆數密邇大德大德令余編次偈陀若干首且請作冠語固辭不可乃賦一偈以代冠語偈曰清衆賀分座瑤章錦繡新緝編成法寶勿比世中珍

(25) 興雲集序

夫同氣相求同声相應者所謂時節到来因緣會遇者也豈見龍吟雲興越貫鱗禪納者飽叢林英靈末世光明幢今夏撰拔于衆任以充堂中首座於是有同志同行親朋善友各以梵偈賀其三級薦過之榮舉予祝頃湫倒壑之瑞兆覃制尾玉仙書記淨寫卒業日禪衲自來於余室需題名于冠語余思之今禪衲之在于此職者實得一陽來復之時者也因命之云興雲集又告日行解不相應難成諸仏師請正行明鮮且暮宜思密雲弥布之金言是為序

(26) 玉花盛開集序

法非有榮衰一人非有智愚一人修則發聖智不修則為凡愚是故有其人則其法榮無其人則其法衰法榮衰唯依人而已夫智純禪德其修德人乎入吾勝會為元座有賀偈若干

上藍天中の『無明室錄』について（川口）

(24) 賀偈集序 代作

古曰選官不如選仏蓋選仏由來久矣粵西方函丈建勝會集

上藍天中の『無明室録』について（川口）

首一大樹書記編次作一冊子二章三起单前一來三千余之室二徵三序名於余一余辞矣不可請再三終不能拒開卷覽之同会玄侶貫妙華綴三宝珠彷彿仏会歌唄讚頌寔足以莊飾禪德之榮職不見古人曰珊瑚枝上玉花開風遞清香遍九垓禪德亦曾聞知是語矣故命此冊子一名玉花盛開集夫如春色無高下不論花枝短長以平等化流布海內可不孤諸禪德之賀悃矣是為序

(27) 崑岡集序

玉峯禪哲津陽欣勝摩々帝禪峯公之徒也峯公余之三十年前之同參也余曾一夏安居驪山善福精舍此時初知禪哲蓋幼齡也其後歷數歲禪哲志雲遊以有旧縁遠到此山隨從余有年矣禪哲稟性卓絕勤學業忘寢餐琢磨積功久矣光彩漸露外是以今夏請以充堂中一座遠近耆德同會兄弟各以瑤章瓊篇賀禪哲舉桂之榮職世所謂同氣相求同類相聚者也今已採緝成卷帙把披覽之則髣髴如下登妙高入玄圃寔足以讚其真修密証之義余之以崑岡名此集者良有以也閱者勿生怪焉是為序

(28) 没絃琴序

古鵬禪德宗門之拔群也妙齡而已知寶鏡三昧歌及窺龍巢探虎穴玩吟弥覺意味深長後到此洲之掛錫吾山初徹証十劫觀樹玄旨深漸異計看話禪學可謂過則勿憚改者今冬以禪德任第一籌乃以十月十一日就三千龍蛇窟修萬機休罷之齋於是雲衲霞袂称讚超階之盛舉或吹無孔笛或打氈拍板各以瑤章瓊篇伸賀悃皆是木人石女之唱歌而絕情識忘思慮者也台橋書記緝錄淨写持來徵於余題名乃命曰沒絃琴夫沒絃琴驚峯之余韻熊嶽之遺響吾門正伝之秘曲也禪德他日擊節需知音於海內可謂不空多年之功劳矣是為序

(29) 興雲集序

易日龍吟雲興夫同氣相求同声相應是自然之理豈可疑乎粵萬龍上座南豐之人天資爽邁志慕九三之跡東漂西泊有三年于茲今夏在三千龍嶽之聖會領分座職可謂得三級薦過換骨之偈與領下明珠闕於光彩其詞新調亦高雖郢曲曷愧棠足讚緇門之及第二章夏末纂緝成小冊子求題名於余余命之以興雲蓋以興雲名此集者他日上座作一方住持大布慈雲灑耳雨一期以令焦園橋木再長枝開花結果也是

為レ序

(30) 休寵集序

古人曰納帳懷頭萬事休此時山僧都不会蓋仏道修証者以ニ不^レ會不知ニ為ニ極致ニ是古之通義也不^レ可^レ怪焉往古者措而不^レ論宋元以来及ニ干明季ニ閱ニ諸師遺錄ニ得ニ吾宗古實ニ唱ニ師少矣僅存者三兩輩余者皆誇ニ機鋒之門風ニ者而已而到ニ後世ニ者弥絕不^レ伝

可^レ惜可^レ悲矣吾^レ皇和幸有ニ永祖諸錄ニ不^レ失ニ古實ニ依^レ之如來本証之大法至ニ如今ニ存矣誠我党慶幸中之慶幸也粵大器禪德蹈ニ嶮學ニ危叩ニ諸大老門戶ニ大得ニ休歇ニ今夏分ニ座太平之会ニ為^レ衆宣ニ密旨ニ示ニ潛行ニ可^レ謂末世光明幢於^レ是乎有ニ同臭之新知旧友ニ各賀ニ禪德寵忝之榮職ニ以ニ偈頌ニ伸ニ祝意ニ書記某纂ニ緝之ニ成ニ卷請ニ序名於余ニ余幸助ニ化於勝会ニ略知ニ禪德之寔履真踐ニ是以不^レ辭而應ニ干徵ニ又告曰禪德住院開ニ化日唯拳ニ揚宗祖正伝ニ勿^レ說ニ今時様胡乱之禪風ニ是為^レ序

(31) 卿雲集序

等禪大德縉林龍駒鳳雛也今夏分ニ座吾山ニ同志同行徒來ニ聚盛筵ニ宴不^レ異ニ鶯嶺之嘉会ニ有ニ祝詞賀章ニ集而成ニ小冊子ニ初秋日携來乞ニ序名於余ニ余乃命目ニ卿雲集ニ蓋卿雲若^レ雲^レ非雲若^レ烟

上藍天中の『無明室錄』について（川口）

非^レ烟郁郁紛紛蕭索輪囷可^レ謂仏子開運瑞兆也大德年來隨ニ侍余ニ親學ニ永祖正伝王三昧ニ已到ニ闡奧ニ焉他日住ニ院拳ニ揚修得底ニ以接ニ得四海之雲衲ニ則宗門楨祥以^レ何加^レ之耶宜^レ荷ニ負大法ニ不^レ變節操^レ矣若屈ニ駿趾ニ歛ニ靈翮ニ一生ニ墮氣ニ跡同ニ凡禽野獸ニ是余之鑑之差誤也婆心難ニ止贅ニ數語ニ以為ニ快馬ニ重加ニ一鞭ニ者也是為^レ序

(32) 南詢成功集序

夫善財南詢常啼東請是蓋求法旧蹤也雖ニ隔世遼夏ニ西天東地修ニ梵行ニ者所ニ希慕ニ也其採ニ有名得法者ニ以錄ニ千僧伝ニ昭々于世吾^レ皇國神君創業後洞家一宗別降ニ鉤命ニ學徒遍ニ參江湖ニ二十年而後登ニ於錄刹ニ紀ニ夏臘之滿未滿ニ以^レ不^レ越^レ法為ニ定式ニ也奧舜隆上座西肥下松浦郡津吉長泉閑居舜山老曾子也妙齡撥草勲績尤多矣況器宇沖邈容止閑清蓋縉納龜鑑之徒也今冬在吾龍蛇窟ニ任ニ板首職ニ為^レ衆見ニ悅眠ニ於^レ此乎聖会兄弟各以ニ詩偈ニ祝ニ上座拳桂之拳ニ書記某覃ニ歲抄ニ據摭淨寫微ニ序命於余ニ余略知ニ有ニ古人之風骨ニ深通ニ離花仏母之大義上故預獎ニ上座曰必他日以ニ化儀ニ為^レ任掬ニ長泉之余流ニ以霑ニ潤潤株腐草ニ可謂弘法之術髣ニ鬚堯仁舜德ニ豈可^レ謂ニ勞而無^レ功因以ニ南詢成功ニ目^レ集以賽^レ責勿^レ惡ニ余婆心之切ニ是為^レ序

上藍天中の『無明室録』について（川口）

(33) 獅子吼集跋

獅子一吼百獸惱裂名于此集以師子吼者蓋有微意哉夫吾宗正伝之学徒夢不聞迷悟凡聖怪異之說常習超仏越祖真正之行故雖隻言半句皆是無畏說也豈有着獅子皮作野子鳴之雜語是為後序

(34) 瑞華集跋

行同志矣如賀其盛事有偈有頌句々言々襲靈山余芳含少林遺实更無別種異說矣先有魚沼氏作前序所以可說者審尽之也矣余又宣何歟

(35) 題圓成集後

因圓果滿而後成正覺矣仏仏爾祖祖爾衲僧亦爾所以為爾何耶雖仏祖雖衲僧未聞法未修道則不能全因況於果乎其聞法修道而後登不退位登而後圓種智成菩提是學習通規也方今以圓成題此集者諦圓首座同趣操於古賢他日

(36) 書写妙經序

法華經者諸仏出興本懷衆生作仏直道誠哉雖存多訳以什師訳為正吾朝流傳一千有余年于茲信此典者亦不為少矣伝言吾邦經主相応土可知其言不可誣焉西肥平城近藤師克居士深信諸仏輪回六道六趣元為一仏種細書金文七軸作一小軸其字画清明不恥名書家卒業之後余偶遊瑞雲精舍居士聞余來而需於冠語余隨喜居士能修善事書此贈之

(37) 紋井碑

姓穗積氏鈴木字平内太夫諱重善後號善阿入道文治中生紀南之熊野鈴木三郎龜井六郎之同母弟也兄弟同為源判官義経之家臣平氏敗後判官不帰鎌倉行于東奥二兄從之重善請行兩親不可心慕蘭之密追迹到三州矢作之里患脚疾遲留數日伝聞判官軍失利兩兄共戰死深嘆嗟之再不欲帰本貫或夜感靈夢若到賀茂郡矢並之邑且有居住之地必子孫榮盛遂尋到矢並又或夜夢到岩津之市大得生計之利喜其吉兆往岩津果見有一老人短刀掛九藍一枝

獎以至道流布於海內請勤旃

入市即求老人識、不凡人付藍与短刀得而帰、邑以其藍投井中染物無如意依之日得利俄為豪富家子孫勇士続出焉世世属官軍多勳績矣至于今六百有余載胤嗣不絶寔神夢靈応不虚矢並村有旧井称糾井則定村久世逸平重善後裔也以先祖遺蹟立碑記其由緒以伝後代銘曰一井藍水染衆色奇自有神助不_レ用狐疑

㊲勝光開闢行巖雲步老禪贊并序

寛文中細川侯封内入來耶蘇徒蟲惑蒼生有司屢以嚴政駁逐之余党猶在君侯愍測其愚試二三沙門一步老応于其選以君命一日日演暢正法時時蕩滌邪思旧染漸蠲恍如醒夢捨惠帰善如初信三宝於是君侯崇信方便化度之不空為歩老草創能仁天福両刹遂及興支院数所寒歩老精進度之余沢也本山両刹在木像存矣支院唯画像而已勝光已為法幢地有画像未有贊辭寺主鏡公請贊于余余乃贊曰帰敬仏陀前歩後歩住忍依隨菩薩左之右之行慈体上著緇心内含彩生長圍岩之撫毓況醉石平之威儀不求入室承嗣蔑視紙払欲蹈出塵階級奉持擣從欽仰神祇孝養父母以真影掛壁圓月照清池

(勝光寺(大分市大南町竹中)開闢開山)

上藍天中の『無明室錄』について(川口)

⑨瑞雲二十三世鳳山俊鳳大和尚贊

天懸福日山單祥烟神鳥翼展玉樹瑞花芳吐金田揮白塵唱道若木靠鳥藤布化虞淵經營蓬戶今休相浦上鼎新梵宇今去平城辺隨侍徒雖恨瘞香履嗣承子多喜領禪筵余四十年前旧識今為贊語不_レ無縁

(瑞雲寺(長崎県平戸市鏡川町)二十三世鳳山俊鳳のこと)

⑩延命隱居天嶺禪師頂相贊

發心辭桑梓尋師無遺子能守宗門之嚴規尽伝祖室之秘訣雄名振東西玄化布凹凸殊將古田肥餽重興古丘春滅慈顏已如春天之花厖眉恰似冬嶺之雪常臨稿海之森茫長聳寿山之巔堅体磨不碎淨業縕無涅幽隱德圓題贊言欠

(延命寺(長崎県平戸市津吉町)三世大等天嶺(齡)のこと)

⑪祇園請太珍宗和尚山門疏

山不論高低有仙為名巒水不問深淺有龍為靈湫誠哉言也大雄山祇園禪寺山門兩序等恭敦請堂頭和尚大禪師祝

上藍天中の『無明室録』について（川口）

國開堂演法聊綴糟糠短疏以抒丹悰其詞曰右伏惟樓閣聳

河漢清衆輻輳古靈場鐘鼓轟海隅善神擁護最勝地爰開禁足

安居洪範殊張晨參暮請嘉猷某甲和尚大禪師贍量宏恢氣概

雄峻蒼余游龍驚蛇入石妙筆禪外愛冰肌玉骨鬪雪仙葩

揮勤行精進不生退情隨緣濟度豈有倦色故繙七軸之經

卷德化布大千深探一乘之宗源利潤施刹海伏希開堂祝

聖壽提爐炷心香

（祇園寺（名古屋市緑区有松町）のこと。
太珍宗とは、三世宝珠宗珍のことか。）

④同門疏

大日本國東海道尾張州有松邑大雄山祇園禪寺堂頭大和尚禪師
今冬端居千華獅子座為國開堂演法某等仰榮光不堪雀躍之至一辭茲裁焉何皇恥不文乎唯瀝誠情慶賀冀垂青其

詞曰瑞泉分派清冽涵不變之秋月曇花生口馥郁綻未兆之

④乘國請鍊石禪師山門疏

春英泝流到源無兩般之波潤摘葉尋枝有一樣之香氣恭以堂頭宗公大和尚法社間出領袖禪苑希代爪牙不知人間是非何論世路高下曾遊崎陽馳彩筆酬答異域詞匠文宗已歸張海建法幢引接本邦鳳雛龍子於是運与緣共享德連名齊著言慶登燈玉座發揚祖風拈梅檀香祝延皇

壽

④同旧疏

今茲寛政萬年龍集屠維協洽孟冬安居日大雄山祇園禪寺山門

兩序等請堂頭宗公大和尚為國開堂於是同旧苾芻祇製短

疏欣欣然將莫大之化儀其詞曰幽壑龍興瑞雲靄靄屬谷口

深林虎嘯祥風颶颶至巖前時節到来梵飢降臨化席因緣成熟

繙素圃繞法堂恭惟堂頭太珍宗大和尚人中麒麟草裡蘭蕙宗眼

明於日月戒軀潔於玉珠臥同床交際齊陳雷鐵鎗擊難

碎穿被底旧誼越管鮑金刀剪不開提網無愧羅山之後機

敲唱堪繼保壽之辣手伏請茲行千秋不犯令祝聖君遐

齡連鼓一種沒絃琴驚瞎臚聲耳寛政十一年十月吉旦

（寛政十一年（一七九九）十月のため。神藏寺時代である。）

朝庭之有嚴政可_ド以勸善懲愚禪苑之有清規可_ド以匡徒領衆臨機心變有權有實大龍山乘國禪寺山門兩序等恭請新命堂頭大和尚祝國開堂演法聊裁蕪辭短疏伸哀憫其詞曰右伏以鐘神秀名鑑非狐狸窟穴凡境選明德雄刹為天龍

擁護靈場一為レ提ニ墜地宗綱一故迎ニ補天哲匠一某甲大和尚樹翁跨竈淵老蘭芽慈容溫々潔ニ於磨ニ崑崙壁ニ道軀硬々精ニ於鍊ニ龜水金ニ曾契ニ証柏岩洞祖玄機果暴ニ露羅山保寿密旨既逢ニ化鱗擺尾日ニ更喜ニ頑石点ニ頭時一伏希兜樓祝ニ聖主萬年一醍醐漣ニ蠶民

稲腹一

(乘國寺(新潟県上越市南本町)十九世點應鍊石のこと。)

(45) 松石請大忠鼈海和尚山門疏

道無ニ古今之異一人有ニ古今之差寔哉有ニ其人一則其道弘無ニ其人一則其道窮華嚴山松石禪寺山門両序等敦ニ請堂頭大和尚一開堂演法謹裁ニ鹿橫短疏ニ以頑ニ葵藿丹心ニ其詞曰右伏以大師草創古道場峯回路轉杳隔ニ塵俗之凡境ニ神君改号大宝刹松栄石歌實為ニ仙梵之靈区爰剋ニ九旬鴻規普聚ニ三學聖衆某甲大和尚能師復開曉翁再生曾掬ニ永沢不尽流還抱ニ神藏無價宝戒躰清烈常着ニ忍辱之衣法眼圓明長坐ニ慈悲之室時哉丹丘鸞鷺翔舞碧漢之上瀛海鼈鼈騰躍紫瀾之間伏希毫光速照ニ高山祝ニ延一人睿等一井霖卉澁焦土露ニ潤萬木枯根一

(松石寺(神奈川県厚木市上秋野)二十八世大忠鼈海のこと。)

上藍天中の『無明室錄』について(川口)

(46) 豪徳請漢三和尚山門疏

華藏界内蘿迷南畔大日域東海道江都城西大谿山豪徳禪寺彦城道場一即日開堂演法同門其瞻望不輟竟申ニ慶詞右伏以碧雲擁閨迎發牛車之西極黃鳥歌圃喜到ニ虎錫之東方臨門簪纓結ニ勝因入ニ室苾芻飽ニ德化某甲大和尚禪河漲ニ逆水教海回倒瀾言行相顧偏正全該理事圓融功位密転以今思古以古見今奉ニ師信陽共賞ニ更科之月接ニ衆江国獨弄ニ志賀之花他家自在ニ提斧之歎呼同門豈忘ニ董席之嘉想伏請嚴贊ニ後天

上藍天中の『無明室錄』について（川口）

無窮之叡筭、親統先祖不尽之真風。于時寛政萬年上草沼灘中
秋穀旦同門九拜謹疏

④8 同門疏

茲年癸亥秋淡海彦城祥壽山清涼寺 新命堂頭漢三一公大和尚
禪師進寺開堂演法同門苾芻天中遙聞盛儀不堪蹈舞聊裁
短疏以伸嘉悰其詞曰右伏以文殊道場集前三後三衆普賢
願海容三千波萬波流擊鼓聲遠徹鏡嶺雲懸旛影常蘇琵湖水
爰有其境必其人臻新命堂頭上漢下三大和尚禪師超越位階
透脫滲漏賢檀馳書日明匠提斧時靈龜躍出重潭仙禽舞下
巨嶽正好持淨籌播布瓈多之玄化移香履拳揚達磨之真
風以是旧林柏故舒說忻情幽阜蘭新吐芬芳氣宜慎青雲
之昇進勿笑白首之蹉跎唯歎雲月同何恨溪山異伏希普
施清涼沢霑潤闔國四民端坐寶華台祝延聖皇萬寿于
時享和萬年秋同門比丘東向天中頓首九拜謹疏

④9 東向開山大和尚百五十回忌宣疏

淨法界身本無出沒大悲願力示有去來仰冀真慈伏垂照鑑
州天草郡新休村松栄山東向護國禪寺住持比丘某甲今月二十一
日伏值開山大和尚一百五十年之遠忌修三夜三昼之法會

虔備香花燈燭茶菓蘋蘩以伸供養謹集清衆諷誦大仏頂
萬行首楞嚴神咒所華殊勲上酬慈恩者伏以湛樂虛寂隔離
囂塵道芽生處撥軒知不到之玄機心花綻時露現未徹在之
妙用牙齒如劍鋒咬著列祖之骨髓背梁似鐵石坐斷諸仏
之項顙至如津和野復興古梵閣洞螺洲草創新道場刺史県
令斉欽慕農父樵客共帰崇於是密輔翼朝政顯宣揚宗教人
々悟真宗消衆或箇々開正智滅群邪高哉師道山聳嶽秀
深哉師德江勇海流生前与滅後枝派兼根源同綴其葉而
聯其花萼共溷其泥而揚其波瀾伏希真慈光降黃閣簾中
之宝座納受紫雖帳外之珍饈謹疏開祖洞鑑哀愍悉知謹疏

⑤0 達祖忌宣疏

淨法界身本無出沒大悲願力示有去來仰冀真慈伏垂照鑑
大日本国西海道——法孫比丘某今月初五日伏值神旦
高祖菩提達磨圓覺大師大和尚大般涅槃之辰謹具微供因集
合山清衆恭就真前諷誦大仏頂萬行首楞嚴神咒所鳩殊勲
上酬慈蔭者伏以伝法竺乾末開化神丹初清風肝胆剖露
今來古往明月眼目照耀地軸天閥宣四行觀慚惣通正道飢渴
之侶說六門集愍惻邪計沈溺之徒於是疑靈雲散惠日照
於此方覓海浪平智艇到於彼岸放開一身分三身捏聚十

地一為ニ一地一以レ是彈ニ呵有為功一教ニ誠無相施一仏々不即極機人
々不離要訣聞レ之知ニ之思レ之悟レ之淨智圓明体自空寂茲于幸
余ニ一花五葉之春ニ知ニ結果自然之秋ニ子子孫孫生生世世統ニ其
宗灯一佩ニ其心印一祖師洞鑑慈照容納謹疏

②安國寺開山忌疏

淨法界身本無出沒大悲願力示現去來仰冀真慈俯垂照鑑南闇浮
提大日本國西海道肥後州熊本城太平山安國禪寺住持比丘某山
門今月廿九日伏值當寺開山勅特賜清光圓輝禪師一百五十面之
遠忌預於此日虔備香花燈燭茶菓珍膳以伸供養因集合山清衆同
音諷誦楞嚴神咒所集殊勲上酬慈恩者右伏惟處世而逢家難避地
而慮身安是以着離塵之方袍磨學仙之圓鑑依棲明師撥転天閨豁
開摩醯之眼目追隨良友抑翻地軸露現那吒之形軀不染汚而佩仏
卯非思量而桃祖燈大機大用揚化北越春日野之際徹困徹體唱道
南肥熊本城之傍加之默記五千卷之奧義而杜舌鱗則國君帰崇堯
揮七百則之密意而開口門則衆僧瞻仰幻質百年持有待仮名一代
帰無常悲風吹地哀烟塞天肉身雖沒法身猶存仰冀速轉願輸出寂
滅定降臨此場洞鑑微憇謹疏維時文化十三年四月二十九日法孫

嗣 比丘某謹疏

(安國寺(熊本市横
手町)の開山忌疏)

上藍天中の『無明室錄』について（川口）